

名誉会員の推挙に寄せて



上野谷加代子 新名誉会員

【本学会役員歴】

第20期 理事（3年）

第21期 理事（3年）

第23期（第2期） 理事（2年）

役員通算3期（8年）



社会福祉学会のさらなる発展を祈念して

この度は名誉会員の称号を授与していただきありがとうございました。謹んで、喜んでお受けいたしました。総会当日は和気純子会長から贈呈状をいただきました。素敵な花束は自宅へ送付されていました。また、様々な心遣いをいただき感謝に堪えません。

研究者生活50年で忘れることのできない素敵な1日となりました。改めて、会員及び役員の皆様に感謝申し上げます。

私は、学会の役員は会員諸氏の目となり耳となり、様々な情報や要望を役員会に届け、何よりも会員の方々が社会福祉研究をめぐって、互いの情報交換や共同研究、そして活発な対話ができるような環境を整え、福祉社会づくりへ貢献することだと考えます。若い時にいただいた歴代会長や役員の方々からの厳しいご指導や仲間からの導きは、いずれも私の研究スタイルを形成するのを応援してくださいました。この恵まれた環境を今度は若い方々にお返しをと役員（理事）をお引き受けしていました。さて、私がやり残している事柄があります。それは女性研究者、とりわけ若手研究者、実践者への応援です。女性研究者として50年、それもアクションリサーチを標榜し、フィールドを30年踏査しなくては、と大見えを切った者としての反省です。とにかく日本はいつまでたっても女性研究者が生きにくい、と思うのは私だけではないと思います。特に地域や地域住民を研究・実践対象にする地域福祉分野は地域が保守的で、男性中心でものごとを決めてきた文化や生活が展開されていることが多いので、女性研究者は戸惑います。

また、最近は改善されつつあるようですが、家事、育児、介護等、女性の負担の上で成り立っている暮らしは、研究者、実践者を問わずかなりの能力と良い環境がなければ実力を発揮することはむづかしいでしょう。ましてや、地域で暮らす女性のニーズ（声）をキャッチするには、研ぎ澄まされた人権感覚を必要とします。ですから、旧来の縦割り、分野論やドメスティックな研究方法論を改めて問わねばなりません。実践者・研究者を問わず管理、抑圧されことなく自由で私が私である尊厳と互いを尊重できる、楽しい研究、教育、実践の職場であってほしいものです。社会福祉学は一貫して生活の場での実践を他分野の研究者と共に一緒に進め、理論化していくことが求められています。対話と学び合いを大切に、さらなる発展を祈念します。